



3号 2024年4月発行

目次

- ・現代人形研からのお知らせ
- ・展覧会リポート
- ・インフォメーション
- ・特集 特別インタビュー 長尾千斗（横浜人形の家）
- ・徒然コラム 長谷川裕子



特別インタビュー

「ひとはなぜ“ひとがた”をつくるのか」展

横浜人形の家で開催中の意欲的な人形展が始まっています。

この展覧会の企画を担当した長尾千斗さんにお話を伺いました。

特集インタビューはこの通信最後部に掲載しております。

「紙のメルマガ」はメールマガジン配信時とは異なる編集をしているため、メールマガジンとはデザイン、画像や構成が異なる箇所があります。予めご了承ください。

インフォメーション

個展

◎宇野亞喜良展 AQUIRAX UNO

4月11日(木)～6月16日(日) 月曜休廊(祝日の場合は翌火曜日)

11:00～19:00(入場は18:30まで)

東京オペラシティ アートギャラリー

<https://www.operacity.jp/ag/>

東京都新宿区西新宿3-20-2 TEL 03-5353-0756

宇野の初期から最新作までの全仕事を網羅する、過去最大規模の展覧会。1950年代の企業広告をはじめ、1960年代のアングラ演劇ポスターや絵本や児童書、近年の俳句と少女をテーマとした絵画など、多彩で貴重な原画や資料等を紹介します。

◎井桁裕子展「月と肖像」

4月27日(土)～6月9日(日) 月・火休館日

12:00～19:00

会場: 京都場 KYOTO-ba

<https://kyoto-ba.jp/gallery/>

京都府京都市中京区西ノ京南聖町6-5

(千本三条から三条商店街を入り一筋目を北に約80m右側)

入場無料

肖像作品4点展示。焼き物の小品を20点ほど展示・販売。

<イベント>

・4/27(土)17:00～オープニングセレブレーション

・4/28(日)15:00～ 篠原勝之と井桁裕子の対談(司会:仲野)

参加費1,000円(定員30名)要予約(info@kyoto-ba.jp)

・6/8(土)15:00～ 森田かずよダンスパフォーマンス(+アフタートーク)

参加費1,000円(定員30～40名)着席+スタンディング要予約(info@kyoto-ba.jp)

「大きい作品はあまり展示の機会がないのですが、今回は4点《枠片山の鬼 舞踏家・吉本大輔の肖像》、《片脚で立つ森田かずよの肖像》、篠原勝之氏にモデルになっていただいた未完の肖像作品、そして2004年に東京都現代美術館で展示了《音楽家・金田真一氏の肖像人形》を20年ぶりに展示いたします。関西でこのような個展は初めてです。私は4/27,4/28,6/8,6/9に会場にあります。」(井桁裕子)



「片脚で立つ森田かずよの肖像」

◎山本じん展「彼方」

4月27日(土)～5月23日(木)

休廊5/1,2,8,9

第1部「引力」4月27日(土)～5月11日(土)

13:00～18:00

第2部「69」5月12日(日)～5月23日(木)

Galerie Loeil(ギャラリーロイユ)

<https://www.g-loeil.com/>

神戸市中央区北長狭通3-2-10

TEL078-595-9070



杉田明十志

◎杉田明十志作品展

創作人形・マリオネット・絵画を展示します。

5月2日(木)～5月13日(月) 水曜休廊

11:00～18:00(最終日16:00)

会場 静岡市葵区鷹匠2-4-40 亀山画廊

詳細(杉田)

hyakueido-dolls@yahoo.co.jp



◎月光社個展「覇権の国のアリス」

5月12日(日)～21日(火) 水曜休廊

13:00～19:00

会場: 画廊 ジャロフ Zaroff(ザロフ)

<http://www.house-of-zaroff.com/>

東京都渋谷区初台1-11-9 五差路

TEL 03-6322-9032

(作者コメント)

不思議の国のアリスにおける「膨張」と「転倒」のモチーフを当時と現在の社会状況に反映させ「覇権」がもたらす戯画をアリスのキャラクターが演じています。月光社の土人形によるアリスの世界の新たな解釈「覇権の国のアリス」をお楽しみください。

◎四谷シモン「人形とパステル画」展
 5月4日(土)～5月19日(日)月・火休廊
 最終日は17:00閉廊
 OPEN水曜日～土曜日:12:00～19:00 日曜日:12:00～18:00
 LIBRAIRIE6
<https://librairie6.com/>
 東京都渋谷区恵比寿南1-12-2南ビル3F TEL 03-6452-3345
 ※5月4日(土)15:00頃より作家在廊予定

展覧会

◎横浜人形の家
<https://www.doll-museum.jp/>
 9:30～17:00 (最終受付16:30)月曜休館(祝日の場合は翌火曜日)

3階企画展示室

4月6日(土)～6月30日(日)
 「ひとはなぜ“ひとがた”をつくるのか」

観覧料:大人(高校生以上)1000円・小中学生500円*入館料(大人400円・小中学生200円)含む
 人のフォルム(かたち・かた)そのものの多様性に着目し、それらを生み出した心と、精神性の多彩さ、身体のかたちの異質さゆえに生まれる表現の豊かさにふれることを試みます。

出品作家:工藤千尋、土井典、高橋操、大森記詩、「やまなみ工房」(井上優、大路裕也、大原菜穂子、鎌江一美、神山美智子、川邊絵子、栗田淳一、酒井美穂子、清水千秋、森田郷士、山崎菜那)、「嬉々!!CREATIVE」(青木南海、岩本義夫、筧純爾)、その他

<イベント>

4月13日(土)13:00～16:30「ひとがたをつくるひとたち」

- ・やまなみ工房「地蔵とリビドー」上映会
- ・トークショー(柳野展正、山下完和、工藤千尋、北澤桃子)

6月8日(土)13:00～14:45

- ・白鳥兄弟による土偶マイム&ミニトーク×「嬉々!!パフォーマンスラボ2公演」

6月22日(土)13:00～15:30

- ・土井典追悼 トークショー&舞踏公演——人形を語る『夜想』と『DOLL FORUM JAPAN』
- トーキョー登壇者:ミルキィ・イソベ／羽関チエコ／柳山裕子、舞踏公演:小林嵯峨(NOSURI主宰)



2階多目的室

4月20日(土)～7月21日(日)

「いざなぎ流のかみ・かたち 一祈りを込めたヒトガタたち」

観覧料:大人700円・小中学生350円*入館料(大人400円・小中学生200円)含む

高知県の北東部・香美市物部(ものべ)町に伝わる「いざなぎ流」は、陰陽道や修驗道、仏教、神道などの要素が混在する民間信仰です。いざなぎ流で用いられる御幣(ごへい)は200種を超える多様なもので、太夫と呼ばれる宗教者によって切り出されます。その特徴のひとつに「ヒトガタ」の御幣があり、目や口、角、時には手足も持ち、御幣そのものが方位神や精霊を表すこともあります。



※現代人形文化研究会では、この「ひとはなぜ“ひとがた”をつくるのか」「いざなぎ流のかみ・かたち 一祈りを込めたヒトガタたち」を鑑賞する勉強会を6月に開催します。鑑賞時にはそれぞれの企画にあたられた方によるガイドツアーを予定。また、鑑賞後は横浜中華街で懇親会を予定しています。

◎FANTANIMA!2024 東京展

約90名の国内外作家による生き物造形の展覧会

2024年4月25日(木)～4月30日(火)

<https://fantanima.nonc.jp/2024>

会場 丸善丸の内本店4Fギャラリー (JR東京駅丸の内北口前 丸の内oazo4階)

9:00～21:00(最終日は15:00閉場) 入場無料

※初日は3時頃まで整理券入場となります。

詳細 <https://fantanima.nonc.jp/2024/>

主催 羽関オフィス(ノンクプラツツ)

◎ドルスバラード(ぼらん・どおる)

「SO COOL!!」

4月20日(土)～5月5日(日)(定休月曜・火曜)

11:00～18:00 完全予約制(前日まで予約)

東京都板橋区桜川3-14-5 TEL 03-6780-0338

<https://dolsballad.seesaa.net/article/502767054.html>

出品作家:一宮圭 En カウラ 銀狐久 sakoooo 月見月 小川クロ 菜 朋トモエ 菜奈乃 林美登利 FREAKS CIRCUS 芽々木 y(五十音順・敬称略)



人形劇

◎江戸糸あやつり人形結城座 「変身」
5月 29日（水）～6月 2日（日）
下北沢 ザ・スズナリ
東京都世田谷区北沢 1-45-15
チケット（全席指定）一般 5600円、U30（30歳以下）3,300円、学生 2,000円
予約 TEL 042-322-9750（平日：10時-18時）、チケット販売 <https://t.pia.jp/>（Pコード：524869）
詳細 <https://youkiza.jp/>

そのほか

◎クラウドファンディング

「愛玩拒否」の人形作家、土井典。評伝発行プロジェクト

6月 28日まで開催中！

<https://motion-gallery.net/projects/doinori-book>

「ペルメールのレプリカを作った作家」「球体関節人形を最初に作った作家」と言われ続ける土井典が本当に目指したもののは…。改めてその間を検証します。執筆榎山裕子、編集羽根エコ。

『DOLL FORUM JAPAN』が新たにDFJ プレスとして送る最初の本です。横浜人形の家の「ひとはなぜ」ひとがた"をつくるのか」とイベント「土井典追悼 トークショー&舞踏公演——人形を語る -『夜想』と『DOLL FORUM JAPAN』」のチケットの特典品もあります。



◎訃報

安達忠良さん 木彫で自称「冗談彫刻」としてユーモラスな人形を制作していた安達忠良さんが逝去されました。

1980年頃から冗談で始めた木彫で立体の世界へ。冗談で始めた冗談っぽい彫刻ということで「冗談彫刻」と自称。各種出版物、TV コマーシャル等に発表。個展、グループ展多数。オブジェ・人形作家・画家として、長野県東御市と東京で活動されていました。心から安達さんのご冥福をお祈りいたします。

現代人形研からのお知らせ

勉強会

横浜人形の人形展ガイドツアー&懇親会

6月 1日（土）午後 1時から

「ひとはなぜ」ひとがた"をつくるのか」「いざなぎ流のかみ・かたち 一祈りを込めたヒトガタたち」それぞれの展示を企画の方に解説していただくガイドツアーです。当会理事長羽根も同行します。

両展と自由見学あわせて 2 時間くらいの鑑賞を予定しています。見学のあとは、横浜中華街で飲茶の懇親会をします（希望者のみ 要予約）。

費用：1300円（両展示の観覧料）

懇親会（希望者）：要事前予約・当日個別精算

お申し込み 懇親会参加の方は 5月 20 日まで、会員専用メールまで参加希望の旨をお知らせください。勉強会のみの方は当日現地で参加も OK ですが、できるだけ事前申込をお願いいたします。

Email member.gendainingyo@gmail.com (メンバー.げんだいにんぎょう @G メール .com)



「ひとはなぜ」ひとがた"をつくるのか」展
栗田淳一（やまなみ工房）
撮影 横浜人形の家

出品者募集

現代人形研—ConiX 展（仮題）】出品者募集

会期 11月 27日（水）～12月 1日（日）

会場 横浜人形の家

参加費 4000円（一人 1点または 1 セットまで）委託料 片道 1000円

参加資格 当会会員（正会員・賛助会員）

定員 先着 40 名（審査なし）

申込開始 5月 15 日 定員になり次第〆切

申込方法 公式サイトに設置する専用フォームからお申し込みください。URL <https://forms.gle/HJuLeurQ5vDeyLE5A>

次号のお知らせ

※次号は 6 月に配信予定です。本会は 7 月より新しい年度を迎えます。

つきましては、7～8 月に総会を開催しますので、そのご案内を掲載します。総会は正会員の方には参加、もしくは委任状提出をお願いいたします。

※原稿募集 「展覧会情報」「展覧会やイベントの感想」お待ちしています。

展覧会レポート

福泉久美子 創作人形&家族展

4月3日～7日 青梅市図書館 多目的室

人形制作をして約40年、福泉さんが19年ぶりの展示を地元の青梅市で開催しました。

約40年前、立川のカルチャーセンターで講師作品の与勇輝さんの人形を初めてみて、迷わず受講を開始。教室を出てからも一人で一年に一体ずつくらいのペースで制作をしてきたそうです。今回は初期のもの含め40点近くを展示しました。女性よりも若い男性や子供が作りやすいとのこと。二人の息子さんの切り絵と写真の展示も併催。表現活動にアクティブなご家族と見受けられました。



「ひとはなぜ“ひとがた”をつくるのか」展

長尾千斗（横浜人形の家） インタビュー



現在、横浜人形の家で「ひとはなぜ“ひとがた”をつくるのか」展が開催されている。時代への反骨精神に充ちた「愛玩拒否の人形作家」土井典の作品をメインビジュアルに押し出したというだけでもその企画がいかに斬新かということが伝わろうが、もちろんこの企画の面白さはそこにはつきない。

日本語では人形は「ひとがた」とも読む。この読みを「補助線」に「人のフォルム（かたち・かた）そのものの多様性に着目」したというこの展覧会が興味深いのは、ただ古代から現代までの多様な作品をずらりと並べているからではない。「多様性」というお題目のもとに「新しい酒を古い革袋に入れる」ような試みが多いなかで、ここでは「ひとがた」をめぐる暗黙のヒエラルキーをあえてはずそうとする小さな試みが随所に見られる。今回はこの意欲的な展覧会を企画した長尾千斗氏に、この企画の意図や背景について伺ってみた。

（取材・文 楠山裕子 画像協力 横浜人形の家）

—まず今回の企画の背景や理由についてお伺いしたいのですが。

まずいつかやりたいなというテーマがあって、それらをどうやったら組み合わせられるのかなというところが一つあったのと、タイミングを読んでいたということがありました。

—テーマとしては、時代的にかなり幅広い時代を取り上げていますがその意図は。

「文明とは野蛮である」といった言説がありますが、35000年以上前の人々から現在にいたるまでの人々がどのような考え方や心を持っていたかを「ひとがた」から推察、考察するようなことは、自分たちが生きてゆくなかで、何か生きるヒントのようなものを与えてくれるように感じています。今回の企画では、「ひとがた」そのものの魅力はもちろんですが、ひとがたを通じてそれを制作した「人間」自身の魅力を探りたい、そういった狙いが根底にあると思っています。

—いわゆる「人形（にんぎょう）」にとどまらない幅広い「ひとがた」をとりあげていますね。

美術史について考える授業のなかで、ヴィレンドルフのヴィーナス（註1）の人形とラスコーの壁画（註2）ではラスコーの壁画の方が古いとほとんどの人が認識していたのですが、実はそうではなかったということで、壁画と立体物の歴史に加え、これらを美術品としてどのように扱っていくのか、何をもってどこから美術史をはじめるかということとか、どこから美術とするのか、といったことについて考える機会がありました。そこからインスピレーションを得て、戦前戦後くらいから現在までの日本の人形だけを紹介するのではなくて、もっと古いところから、その時代の人たちがどういった気持ちで「ひとがた」というものを作っていたのか、どういう思いがあったのか、どういう環境があったのかといったことを知りたいと思っていて今回の展覧会に至ったという形です。

—これまでいろいろ人形についてあれこれ考えていたことをここで繋げていったということでしょうか。

そうですね。人形にも、球体関節人形とかアウトサイダー・アートとかカテゴリーがあり、漠然と自分もそういうカテゴリーを忖度しながら展示を組んでいたところもありましたが、そういったものをちょっと崩したいという気持ちもあり、いつかそういう展示をしたいとは思っていました。他にも扱いたい作家もいたのですが、それこそ「アクティビズムと人形」というテーマでも、ひとがたを扱いたいと思ってはいたのですが、スペース的に限られているのと短期間では難しい部分もありました。



アフリカの民族人形

—とはいっても今回の展覧会はかなり意欲的な展示になっていると思います。展覧会の構成は「01 各時代のひとがた」「02 身体を縫う／欠損と違和」「03 ふくよかな身体あるいは身体からの逸脱」「04 それぞれのかたち」と4つに分かれていますが、これは展示の順番でもあるのでしょうか。

展示の順番とは一応関係はあるのですが、会場では番号は振っていないです。

—それではまずこの「01 各時代のひとがた」についてお伺いしたいのですが、幅広い時代と幅広い人選になっていますね(註3)。

各時代のひとがたについては、そもそも「ヴィレンドルフのヴィーナス」や「土偶 縄文のヴィーナス」などにも「ヴィーナス」という言葉が付随してくることについて、「ヴィーナス」というイメージがバイアスとして作用してしまう点についてはどうなんだろうかと思う部分があって、石倉敏明さん(註4)にはその点に配慮した文章を書くようお願いしていました。またたとえば「古墳時代のひとがた—埴輪」の若狭徹先生(註5)は明治大学で教鞭を取る研究者の方ですが、こういうプロフェッショナルな解説者だけではなく、「縄文ユニット・縄と矢じり」の草刈朋子さん(註6)のように自分たちで独自に探求していくという語り口の方にお願いしたり、佐々木一澄さん(註7)のように、ご自身で郷土玩具の産地へ出向き制作者へ取材し、それらのイラストレーションまで描く方で、ご自身の独自の感覚や思いが反映された語り口が面白くて、ご著書『こけし図鑑』『てのひらのえんぎもの』などもその辺が魅力のある方、そういういろんな語り口で語っていただこうという形でこのラインナップになりました。

—次に「02 身体を縫う／欠損と違和」はどのような企画といえるでしょうか。

工藤千尋さん(註8)はもともと親族の遺伝的な疾患などをテーマにされている方ですが、実は候補者には工藤さん以外にも欠損というテーマで、実際に義足を使っているアーティストの方とかもいらっしゃいました。さまざまな身体のあり方とそれに対して当事者の方が自分なりに戦っている姿というか、工藤さんに関しては自分の作品をストーリー化してファンタジーみたいな世界に置き換えて作ることによって別の世界を形成していくことで自分の当事者性を受け入れていくという、そういう部分に面白みを感じていました。また今回の新作が「欠損」とはまた少し違つて自分の「老い」をテーマにしている。工藤さんは割と自分の今後の出来事を先回りして作品化して作るというか、ある種の不安とか恐怖みたいなものを、起こる前に作品化しているという印象があって、今回の作品展示のなかにも「玄関に親戚が来ませんように」というタイトルのお面がいくつかあって、実際に作ると恐怖としているその親戚が来なくなつたという、自分の祈りが通じたみたいなことも語られたりされているのですが、そういう意味で今回、工藤さんが「老い」を新作としてテーマにして、それを実際に着られる大きな「ひとがた」をしているというように、



工藤千尋作品

テーマが移行しているのも面白いと思っています。

一それでは3番目の「ふくよかな身体あるいは身体からの逸脱」についてはどうでしょうか。土井典、高橋操、大森記詩というそれぞれティエストの違う3人の作家を取り上げておられます。

土井典さん（註9）は昔から好きでした。気を張っているというか、それはすごく感じるのです。何かと戦っている。だけど堂々として、自分の理想形を表現している感じがすごく魅力的に映る。でっぷりとしたお人形で、しかも堂々としているお人形って当時はそんなになかったですよね。土井さんが今の時代にこの作品を作っている人ではないというところも大きいという気がしている。リアルなその時代を知らないけれど、でもその当時、とても制作しづらかった環境だっただろうなとか。だから当時、これだけある種、嫌われてしまうようなものを、というか、男性から見たら嫌われてしまいがちなものを、こんなに大胆に表現していた人という意味でも、だいぶ生きづらかったのではないかという気持ちがあって、今は今で、そういう女性の生きづらさって別の次元であるとは思うのですけれど、何かその生きづらさを追うことによって、自分たちがどう変化してきているのかとか、どういう価値観に転向してきたかというところも見えるのではないかという、展示の意図としてはそういう意図がありました。もちろん自分が土井さんの作品を見たいという気持ちもあるし、土井さんはもっと大きく扱われていはずだよなと思っていました。同じ時代に出てきていた著名な方とかその制作物が取り上げられて大きく扱われているのと比べて不均衡にアンバランスに感じる。だからもしかしたら土井さんにまだいろいろフィーチャーできない何かしがらみがあるのかなとか、何かそういう疑問もアリもしました。



土井典「大山デブ子」 寺山修司が書斎に置いていた人形



高橋操作品

一その疑問はもっとだと思いますが、それについてはまたあらためてお話しできたらと思います。今回の展覧会の話に戻りまして、高橋操さん（註10）はふっくらとした身体の人形を作っていますね。

高橋さんは羽根チエコさんにふくよかな身体みたいなものをテーマにしている方としてご紹介いただいたのですが、所有者が美しいかわいいきれいなものを求められているところに答えようとする作家が多いような気がするなかで、高橋さんは別のベクトルで、すごくふくよかだったりユニークだったりする、顔の表情もそうなのですけどシチュエーションなんかもすごく何かクスッとしちゃうような要素があって、すごくほつとできる人形だなと思いました。ご本人はすごく痩せているというか細身の方なのですが、肥った女性への憧れがあるとおっしゃっている。わたしもめちゃくちゃ太っちゃったらどうしようという気持ちと、でもあのふくよかな、それこそ渡辺直美さんみたいな「ありたい自分」の身体性みたいなもので堂々と生きられる姿というのが一方ですごく魅力的に見える。高橋さんの自分本位でかわいく生きている丸っこい人形が魅力的に見えました。

一大森記詩さん（註11）はどういう基準で選んだのでしょうか。

大森さんはガンプラ（註 12）などが元々好きなタイプだと思うのですけれども、いろんな素材を構成して一つのものを作るというのは、ニキ・ド・サンファルもいろんな素材を使って大きな女性像みたいなものを作った作品があるのですが、私自身も身体といつても私のなかでは内部にも細胞にもいろんな複数のもので組織されているし、何か実は完璧な一つのパーツはないということを何らかの作品で表現したかったというのがあって、それで大森さんを選んだのです。ちょっと異質だったかなという気もしていますが、柔らかいものばかりになってしまうなかで、異質な硬いものも入れたいとは考えていました。

—「04 それぞれのかたち」では滋賀県にある障がい者施設「やまなみ工房」と神奈川県の「嬉々！！CREATIVE」をとりあげていますね。

やまなみ工房さんは2回訪れたのですが、1回目はバスツアーで、今回のイベント（註 13）でも参加していただく櫛野展正さん（註 14）というアウトサイダー・アートをキュレーションしている方がツアー企画をしてくれて、やまなみ工房に行く機会がありました。やまなみ工房は軽度の人もいるのですが、重度の方も受け入れて、とにかく利用者さんが嫌なことはさせないという環境で、皆さんそれぞれ好きな時間を過ごすなかで制作活動もするという感じなので、たとえば大原菜穂子さんというお地蔵さんを作る方は15分ぐらいしか作業しなくて、あとはその辺にいろんな寝転がれるベッドがたくさんあるのでごろごろしたりとか、お散歩したりとかというように一定時間を楽しんでいるという方なのですが、それぞれ好きなことをやっている。それまではやまなみ工房も作業を、たとえば作業単価が安く、単純作業を何度も繰り返すようなものを作ったりしていましたが、そういうことをやるよりも自分が好きなことをやっている姿を見ていると、その方がもう断然生き生きしていいものができるということにやまなみ工房の山下完和 施設長（註 15）が気づいて、そこから方針を変更して、自分たちが好きなものをする。それに対してスタッフが素材をいろいろ集めてきたり、サポートするという体制をとっているのですが、ここがすごい環境がいいのですよね。カフェもあるし、ギャラリーもあるし、福祉施設とはちょっと思えないような感じです。



やまなみ工房 鎌江一美



やまなみ工房 山崎菜那

—それでは最後に嬉々 !!CREATIVEについて教えてください。

嬉々さんは、同じ神奈川県内の studio COOCA(<https://www.studio-cooca.com/>) が母体から独立して2年ぐらい前から立ち上げて頑張っているのですが、環境はやまなみ工房とは対照的で、平塚の街の中でスタジオというかビルを借り切って一番下はギャラリー兼カフェで、他の建物の中では利用者さんが絵を描いているのですが、スペースも限られていて一人ひとりの間隔が狭いなかで机に向かって描くようなそういう環境のなかでも、障がいのある人が下のカフェ兼ギャラリーで勤務してみたり、絵を描いてみたり、自由な時間を過ごしている。本当はひとがたを作っていたら扱いたかったのですが、今回は絵になりました。やはり施設によって色があるので、やまなみ工房は黒というかかっこいいイメージなのですが、嬉々クリエイティブは北澤桃子さん（註 16）がピンクをイメージして割と可愛らしいティーストのグッズ展開もしていてかなり色があるので、そうした色の違いも面白く見ていただけるのかなとは思います。



長尾千斗さん

—今日はいくつかイベントもありますね（註17）。イベントの位置づけはどのようなものでしょうか。

私はいつもイベントも含めて「展示である」と考えています。今回ひとがたの展示を通じて「それぞれの”人”というものの魅力」についても紹介するために、各イベントではそういった制作者の魅力を補完するようなご紹介の機会になればと思っています。

—それでは最後にあらためて全体的な展示についてお伺いしたいのですが、人形展はこれまで美術館などでもありましたか、「横浜人形の家」として特色を出していこうという意図はあったのでしょうか？

今回はかなり挑戦的というか、本当に自分が取り扱いたいテーマとか頼みたい方にお願いしてやっていて、自分自身が満足する展示をしたいという気持ちが強かったので後悔はありません。やはりいわゆる美術館とかみたいな感じにしたくないというのが、自分のなかありました。たとえばなんか癖で西洋的な美術の流れとして「作品」と言ってしまいますが、各時代のそれぞれの人たちは必ずしも作品として作っていたわけではないかもしれません。ですから普通の美術館なら1個1個の作品をしっかり見てもらいたいために、均等に置いて見やすいように、ある種の動線を作ってやるとかそういう感じだと思うのですが、そういうこともしたくなくて、あえてすごい数と一緒に並べてみたり、キャプションを変なところにちょっと置いてみたりとか、「作品」が潰れないように配慮しながら、だけどお行儀良くはならないように、自分のなかでは保ちつつもアグレッシブな展示ができたかなという風には思っています。

註1 旧石器時代のでっぷりとした女性をかたどった裸像。約3万年前に作られたと考えられている。1909年にオーストリアのヴィレンドルフで発見された。ウィーン自然史博物館収蔵。

註2 フランスのモンティニヤックの洞窟で1940年に発見された壁画。クロマニヨン人が約2万年前に描いたと考えられている。

註3 この項目では7人の有識者にそれぞれの時代や場所の人形について語ってもらっている。構成は以下のとおりである。「旧石器時代の女性小像たち—石倉敏明」「横浜人形の家と「ひとがた」と「にんぎょう」の収集について—井伊さえこ」「縄文時代～心の道具としての土偶—草刈朋子（縄と矢じり）」「古墳時代のひとがた—埴輪—若狭徹」「平安～江戸～昭和～ひとがたから郷土玩具へ—佐々木一澄」「大正～昭和から現在につながる創作人形—羽関チエコ」「いま・ここの人ひとがた—菊地浩平」

註4 1974年生まれの人類学者。専門は芸術人類学、神話学。秋田公立美術大学准教授

註5 1962年生まれの考古学者。専門は日本考古学、文化財学。明治大学文学部教授

註6 フリー編集者、ライター。写真家の廣川慶明と「縄文探求ユニット・縄と矢じり」を結成、2021年より thatisgood.jp で「縄と矢じりの縄文旅」を連載中。

註7 1982年生まれのイラストレーター、絵本作家。趣味は郷土玩具蒐集。日本郷土玩具の会会員。

註8 1981年生まれの美術家。母方の女性親族をモチーフに人形を制作。美術家として知られる一方、小説家としても活躍。

註9 新潟県生まれの人形作家、造形作家、美術家。四谷シモンとともに球体関節人形の先駆者として知られる一方、今回の展覧会のメインビジュアルの人形などインパクトのある肥満体の人形をライフワークとして制作。現在、榎山裕子による評伝が出版予定。

註10 横浜生まれの人形作家。陶器制作から人形制作に転身。ふくらとした愛嬌のある個性的な人形で知られる。

註11 1990年生まれの美術家。東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻彫刻研究領域博士後期課程終了。断片的な素材を組み合わせた独自の彫刻作品を制作。

註12 ガンダムのプラモデルの略。

註13 企画展特別イベント「ひとがたをつくるひとたち」は2024年4月13日に開催された。登壇者は榎野展正（クシノテラス）、山下完和（やまなみ工房 施設長）、工藤千尋（アーティスト）、北澤桃子（嬉々！！CREATIVE 代表）。

註14 1976年生まれ。岡山大学教育学部卒。アウトサイダー・キュレーターとしてアウトサイダー・アートの専門ギャラリー、クシノテラスを主宰。現在は「アソカウンシルしづおか」チーフプログラマー・ディレクターである。

註15 1967年生まれ。2008年よりやまなみ工房施設長。

註16 1982年生まれ。長年、障害のあるアーティストの展覧会の企画や商品化を手掛け2022年に独立。現在、嬉々！！CREATIVE 代表。

註17 註13のイベントの他、6月12日「スペシャルパフォーマンスデイ」、6月22日「土井典追悼トークショー＆舞踏公演 人形を語る—『夜想』と『DOLL FORUM JAPAN』」が開催される。詳細はインフォメーション欄参照。

「ひとはなぜ”ひとがた”をつくるのか」

4月6日（土）～6月30日（日） 横浜人形の家 3階企画展示室

<https://www.doll-museum.jp/>

※インフォメーション欄もご参照ください。

月光社・第 27 回岡本太郎現代芸術賞特別賞



人形制作グループ・月光社がこのたび第 27 回岡本太郎現代芸術賞特別賞を受賞した。月光社は人形作家・つじとしゆきを中心とする人形制作グループであるが、現在は「死者に捧げる人形『傭』」の制作を中心につじとしゆきのソロプロジェクトとして活動中」だという。

審査員は樋木野衣、山下裕二ら 5 人。621 点の応募から 22 組が入選。そのなかから岡本太郎賞、岡本敏子賞各 1 点、特別賞 10 点が選出され、川崎市 岡本太郎美術館で 2024 年 2 月 17 日から 4 月 14 日まで展示された。

岡本太郎賞といえば、1999 年の新世紀人形展で日向あき子賞を受賞した藤井建仁が 2005 年に準大賞を受賞しているが、純粹に創作人形畠出身の作家の受賞は今回の月光社がはじめてであり快挙といってよいだろう。しかし「人形の本質がアートと『（ニアリー）イコール』の関係であるならばアートを人形モノの視線で理解することもまた可能」と語るつじ氏の発言には、かつてのような「芸術（アート）」に対する構えは感じられない。これもまた境界そのものが曖昧になってきた多様性の時代の現れなのかもしれない。そんなつじとしゆき氏に今回の受賞についていくつかうかがってみた。（文・榊山裕子）

--- 最初に TARO 賞応募の経緯について教えてください。

TOKYO NO1 DOLL（註 1）の応募者をアート関係者に広げるため審査員長である私にアート方面のバリューが必要と考えていたところ直近にタロー賞締め切りがあることを知り入選すれば 10 月には発表できると考えてダメもとで応募しました。締め切りまで制作期間が 3 週間ほどしかなく更に什器を自前で用意する必要があり色々工夫して仕上げていきました。

—受賞の感想や手応えはどのようなものだったでしょうか？

元々プロモーション目的で応募した賞だったので入選しただけで目的は達成出来ていたのですが、思いの外周囲が賞がとれると言ってくれてたのでちょっと期待してました。先輩たちがアートと人形の接点を模索し続けていたのを知っていたので賞が取れて良かったと思っています。

—出品にあたり、今までの作品も利用し再構成されています。この賞に応募するために意識したことがあったとすれば、どういう点でしょうか？

埴輪からひな人形に至るまでの伝統的な「平置き」の配置に HIPHOP で用いられる引用、切り張り、繰り返しの手法で現代性を持たせた私の人形の手法はアート方面の人にも理解してもらえる自信があったのでいつもの通りに制作し構成しました。賞

のために特別なしつらえにしなかったことで普段の展示の価値が十分なものであることが証明できたと思っています。

ー現代美術に人形の立ち位置はあるでしょうか、あるとしたらどのようなものでしょうか？

展示会場に立った時、以前羽根さんから私の作品がアートとマージナルな境界にあるものという評をいただいた時私が人形の本質を突き詰めた結果そうだったとお答えしたことを思い出しました。人形の本質がアートと（ニアリーイコール）の関係であるならばアートを人形モノの視線で理解することもまた可能です。1位をとったつんさんの作品をドールハウスと見ることもできますし野村絵梨さんの作品はそもそもドールハウスがテーマです。小山泰史さんの作品に現代的な人形道祖神を姿を見ることもまたできるのです。人形の世界にアバンギャルドを認めるのであれば10年後はこれらのよう作品が人形として扱われている可能性もあると思いますし、その様な作品をも人形とみなすように人形の見方が変わらなければアートの世界で人形を一つのジャンルとして認めさせることもできるのではないかと思っています。

ー今回の受賞を今後の創作にどのように活かしていくか、あるいは活かしていくかと思いますか？

30年前デビューした時50代で作家としてのピークを作ることを目標にやってきました。今回のことでの一応の形は作れたわけですがこれは30年前に私が描いてきたこととはずいぶん違います。人生ってホントにふしぎなものです。でも今回のことがどの様な結果をもたらすにせよ作家として活動できるのはあと20年というところ。あとは運に任せて楽しく制作できればと思っています。

註1 創作人形の振興のためにつじとしゆきが自ら立ち上げた公募展。創作人形の個展を審査の対象としている。

つじとしゆき（月光社）プロフィール

1968年東京都生まれ

1996年12月「創作人形三人展（わたべりみ・清水弥栄子・月光社）」（せ・ら～る）依頼、独自企画展やグループ展、店頭での個展、ワンドーフェスティバル等出典多数。

1997年 第12回ユザワヤ大賞 銅賞受賞

1999年 新世紀人形展（ストライプハウス美術館）日向あき子賞佳作・藤田博史賞佳作受賞

2004年 球体関節人形展（東京都現代美術館）出展

2006年 文化庁メディア芸術祭エントレインメント部門審査委員会推薦作品

2012年 横浜人形の家・企画展「アンティークドール×現代創作人形」展出展

2022年 Bunkamura Gallery「月光社～土人形の世界～」

2023年 MISOROGI人形展「果実の気持ち」（丸善丸の内本店ギャラリー）出展

2024年5月12日～5月21日 Zaroff（2Fギャラリー）にて個展「覇権の国のアリス」開催予定



岡本太郎美術館のウェブサイトでは岡本太郎現代芸術賞の受賞者と作品を閲覧できます。
<https://www.taromuseum.jp/>

「作家の言葉」月光社（「第27回岡本太郎現代芸術賞展」図録より転載）

ウクライナの戦争において戦場に赴く未婚のウクライナ兵が精子を凍結保存し、自らが死んだとしても子をなそうとしているというニュースに接した時日本の東北地方に存在する神事「むさかり」との照応を見出した。「むさかり」とは未婚のまま死んだ子供の為架空の配偶者の像を絵馬に描き奉納することで死後の世界での婚姻を成就させる神事である。生涯未婚率が40%にも達するこの国で全ての未婚の死者に向けて、死者に捧げる人形「傭」を用いて「むさかり」の祭壇をしつらえてみた。



作品名「MUSAKARI」
作品サイズ 400 × 120 × 120cm
素材 テラコッタ、粘土、レース、包帯

徒然コラム

理事や会員のフリーコラムです。

個展会場を探した日々

長谷川裕子

20年くらい前の秋、それまで個展をしていた画廊が閉廊してしまったことや、素材を桐塑から木に変えた時期にも重なり、新たな気持ちで人形とファイルを持って作品を発表する場所を探し始めた。

まず日本橋から銀座へ、日を分けて歩くことにした。

日本橋現代美術で有名な西村画廊（注1）に行った。現代美術を扱う人が私の人形をどう見るだろうと思って入って行った。画廊のアシスタントの方が対応してくれて「いくらで売ってるんですか」と値段のことだけ聞かれた。答えるとそれ以上会話が続きそうになかったので急いで人形をバックにしました。オーナー不在の時に行ってしまったので物足りない気持ちのまま、すぐ近くの高島屋の美術画廊に行つた。重厚な空気のなか、一人の美術部の方に声をかけた。

「人形を見ていたけないでどうか」

すると「うちはそういうことはしていないので」とさらりとした返事が。

「そこをなんとかお願いします」と諦めずに続けたので、やっとのこと人形を見てくれることになった。

「面白いですね」。人形を手に持って笑顔で「ファイルを預からせてください」と嬉しい言葉をもらった。

それから8年後、そのファイルが生かされて「彫刻コーナー」で個展が実現した。

数日後、銀座を新橋側から歩いた。自分の人形に興味を持ってくれて長くお付き合いしていただける方にお会いしたいと願いながら、いくつもの画廊を回った。

でも自分の人形を展示するのに良い雰囲気の画廊はなかなか見つからなかった。

さらに数日後再び銀座へ。季節は晩秋になっていた。

以前京橋のギャラリー椿（注2）で椿原さんに人形を見ていた時に「四谷シモンの人形は面白いけどこの人形は可愛いから面白くない」と言われた。そのすぐ後に画廊に入ってきたパンクバンド「フリクション」のギタリストで画家の恒松正敏さんが「わ一面白い」と言ってくれたので沈みそうになった気持ちが持ち直した。

そんなことを思い出しながら並木通りを柴田悦子画廊（注3）に向かった。日本画の画廊だと思っていたのだけれど、その月の美術雑誌で立体の作品を紹介していたのでは非見て頂きたいと思った。緊張しながらドアを開けると、そこにはまさに私が探していた空間があった。私もここに人形を展示したいと強く思い、自分が長く人形を作っていて発表するところを探していることを話し「個展をさせて下さい」とお願いした。

「いいわよ」という返事を頂き体がふうっと軽くなっていくのを感じた。外に出るとすっかり陽は落ち、冷たくなった風にネオンが瞬きだしていた。

5月にその「柴田悦子画廊」で4回目の個展をします。タイトルは「まなざしの向こう側」。

人形たちの見ている風景を想像したり感じてもらえた嬉しさです。

注1 西村画廊 <http://www.nishimura-gallery.com> 国内外の現代美術を扱う。立体作品では舟越桂、三沢厚彦を紹介している。

注2 ギャラリー椿 <http://www.gallery-tsubaki.net/> 日本の現代美術を中心に扱う。

注3 柴田悦子画廊 <http://shibataetsuko.com/wp/> 日本画のほか、他ジャンルも扱う。オーナーの柴田悦子さんはクラフトアート人形"マッチング"コンクールの審査員。



柴田悦子画廊での展示（2007年）